

歎異抄 第十三章第五講

また、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなり」と。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とこそ、聖人はおせそうらいしに、当時は後世者ぶりしてよからんものばかり念仏もうすべきように、あるいは道場にはりぶみをして、なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからず、などとということ、ひとえに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。

(歎異抄第十三章)

現代語訳——— また聖人は、「海や河で網を引き、釣りをしていく暮らしを立てる人も、野や山で獣を狩り、鳥を捕らえて生活する人も、商売をし、田畑を耕して日々を送る人も、すべての人はみな同じことだ」と仰せになり、そして「人はだれでも、しかるべき縁がはたらけば、どのような行いもするものである」と仰せになったのです。

それなのにこのごろは、いかにも来世の往生を願うもののように殊勝に振るまつて、善人だけが念仏することができるとかのように思い、あるときは念仏の道場に張り紙をして、これこれのことをしたものを道場に入れてはならないなどとい

う人がいますが、それこそ、外にはただ賢そうに善い行いに励む姿を見せ、うちには嘘いつわりの心をいただいていることなのではないでしょうか。

*

海で魚を捕って生活する漁師、山で獣を捕って生活する猟師、商売をする者、農民など、暮らしを立てる姿は違っても「ただおなじことなり」といわれていきます。何が同じことなのか。それは先人によって、次の「さるべき業縁のもよおせばいかなるふるまいもすべし」という点で同じだといわれているのです。

前節では、善い心の起こるのも、悪い心の起こるのも過去の宿業の現れであり、また現在どういう振る舞い(行い)をするかということも今の私の自由になるものではなくて、そうするよう過去の宿業の因縁によって為すのであると述べられています。ここではさらに、どういふ生業でもって生計を立てるかということも自分が自由に選んで決めていけるものではなくて、宿業の因縁によるのであると、そう申されるのです。

こういう唯円房の宿業についての言葉は、仏教教義における業論とは違いますし、あるいはまた宿命論に似て宿命論でもなく、運命論に似て運命論ではありません。いわば「機の深信」としての信仰内容と云うべきものです。

*

自分がどのようにこの世の生業を立ててゆくかということも、自分で自由に決められない、ただ宿業のママに生きる外はない。「食わんがためにはこう生きるしか仕方がない」のである、ということ

を言おうとされているのでしょう。

これは漁師も百姓も商売人も、「ただおなじことなり」であります。そういう点からいうと、当時の上層階級であった貴族も武士も僧侶も「ただおなじことなり」なのであります。

けれども、ここには社会の底辺に生き、支配され、差別され、当時(賤業)とみられていた職業に従事する人たちに共感する唯円房のまなざしが伺えます。

支配者としての貴族も武士も僧侶も、その生活の仕方は過去の宿業のもよおしであって、本人が勝っていたので自由に選択して今の職業に就いたのではない、ただ過去の宿業の因と偶然的な縁でそうなっただけにすぎない。

こういうようなことを「ただ同じことなり」といわれるのであります。人は宿業の因縁のママに生きている存在であり、宿業的存在として平等であるという見方を唯円房はもっておられたのだと思います。

*

社会の底辺で、下層民と見られ、職業的にも賤業に従事していた人々への共感と平等感がこの節に感じられるということに関連して、実は親鸞聖人も同じまなざしをもっておられます。それは聖人のお書きになられた「唯信鈔文意」に『りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり』

と述べられています。りようしとは漁師・猟師であり、あき人とは商売人であり、つぶてのごとく(の庶民であり、下層民であり、社会の底辺にはえつくばりながら生きていました。そういう人々を聖

人は(われらなり)とご自身と等しい存在として見ておられ、共感しておられます。

*

自分の心も行いも自分の自由になるものではないし、また自分の生活も仕事も思い通りにすることはできない、過去の業と偶然的な縁によって決まってしまうのだという、このような人生感覚は、いろんな目にあいながら長年日暮しをしてきた実感からは、何か深くうなずけるものがあります。へああなりた、こうなりた、と思いつままでたつてもあいつも変わらぬ私」であり、「どうこういつても、こう生きるより仕方がなかった」というのがいつわらざる実感ではありませんか。

*

そうすると、なにごとにも自分の思いの自由になるのではない、己の宿業因縁によって揺れ動いてきたにすぎないと実感されてきます。

人生のすべては宿業と偶然的な縁に動かされているのだという「歎異抄」のこの部分のお言葉は、一見何か夢も希望も失ってしまうような厭世観というか、(人生はなるようにしかならない)のだという暗いアキラメ主義を教えているかの如くですが、実はそうではないでしょう。

*

この宿業因縁の教えは、人は自分と自分の境遇に対して、これを何とか変えて救われようとする自力のはからいを一端捨てしめてくださり、ひとえに本願他力を憑むことをすすめられます。私たちは普通、自分で自分や環境を変えて、自分で自分を助けようと計らいま

す。しかし、現実には「どうにもならない」壁にぶつかってしまいます。にもかかわらずどこまでも自力をつのって「何とかしよう」という定散心にまどわされ、性懲りもなくそれを繰り返しているのです。

こうした私どもにすべては宿業因縁であることを知らしめて、「自分で自分を助けよう」というはからいの手を一端捨てしめて、本願他力に帰させてくださるのです。それが唯円房の思し召しだとうかがわれます。

*

今から三十年ほど前、インドと一緒に行って半年間生活を共にしたS禅師というお方がおられました。その人と最初日本からタイに行き、現地の寺に十日間滞在して、それからネパールのカトマンズに泊りました。その夜、カトマンズの安宿（一泊四十円ぐらい）に師と泊まり、極く粗末で汚れた木のベッドで寝ました。そういう安宿はそのころ欧米のヒッピーたちがハシシという麻薬を吸うために長期間滞在するのに利用されていたのです。

ところがその夜、まったく寝つかれず一睡も出来ませんでした。それは、ベッドが汚かったからではありません。自分の情けなさが悲しかったのです。どうしても自分はこれほど人徳がないのだろうかかと嘆かざるをえませんでした。

というのは一緒に旅をしたS禅僧の生き方、行いがそれは見事というか、素晴らしかったのです。常に修行の精神を忘れることなく、また常に他者に善を行うことを心がけておられたのです。こんな安宿に泊まったのも、僧侶たる者は贅沢をしてはいけない、質素に徹しなくては

まことの修行僧とはいえないということに泊まったのです。それは十日間いたタイのバンコックでも同じでした。万事が修行三昧の厳肅さで、しかも他者のためには善意を尽くすという姿勢であふれていました。本当にびっくりしました。日本を出て十日間たつて、禅師の生き様と人徳は、逆に私自身がいかにもダメ人間であるか、また人徳が無く求道心の乏しいお粗末な人間であるかを骨身にしみて感じさせました。そういうわけで自分があまりにも情けなくて眠ることができなかったのです。その時に「自分は禅師とは前生が違う。どう逆立ちしてもS禅師のようにはなれない」と、イヤというほど知らされました。いわば自分の宿業の一端を知ったのでした。これはお聖教からというより、S禅師という「実物」に遇つてその鏡に照らされて、自分の宿業の深さを直接に知らされたのです。

朝、白々と夜が明けかかった時、自分はやっぱり真宗しか拾ってもらえない、真宗一筋でいこうとあらためて思いました。そういう意味で、悲しかったけど自分の業を知りまた真宗の有り難さを知らされる大事なご縁でした。

*

宿業因縁に制限されて、自分の自由がないという実感は、人間を絶望させるのかと言え、逆にそこにこそ自由があるということなんです。必然に即するところから自由がある。自分の人生でありながら自分でどうすることもできないからこそ、もはやあらぬところに夢を描いて生きるのではなく、今ここにそのつど与えられてくる事実に沿い、今与えられる事実に即して生きる、いわば「宿業の大地に立つ」というような生き方を選ばざるを得

ないし、またそこにこそ本当の「楽」があることを知るので。今ここにそのつど来ている宿業因縁の事実は、私をゆき詰まらせるのではなくて、私を「生かしてくれる」事実なのです。宿業因縁で自分の思い通りにはならない人生生活はそのまま宿業因縁のままに「どうにか生きていく」人生生活であります。

*

そういう宿業因縁に随順せしめ、そこに本当の自由を享受せしめてくださるものこそ、弥陀の本願であり、弥陀の本願を信受することによって開かれてくる世界なのです、それをこの第十三章の節の後のところで、

『さればよきことも、あしきことも、業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはそうらえ』とお示し下さっています。

*

宿業因縁によって動いている人間は「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」で、縁がくれば何をするかかわらない存在です。よき縁がくれば善をなすこともあるが、悪い縁がくれば罪を犯すこともある危険な存在であります。だから、善人・悪人と区別をしても、その善人がいつ悪人に転じるかわからないし、一人の人の行動においても、善を為す時もあるが、次には悪を為すというようなことで、善人になったり悪人になったり、まことに頼りない存在です。自分で自分の心や行動をコントロールできるのであれば、たとえ外からいろんな悪縁が来てもしつかりと自分の心身を正常に保ち、行動を制御して、間違った行いをしなくてすみますが、そう

いけないのが宿業の凡夫です。*
そういう煩惱具足で不自由な宿業的人間、その人間を助けようとの阿弥陀の本願念佛であります。その念佛の教えを聞き念佛を申す道場に、「バクチをするな」「嘘をつく事なかれ」「大酒を飲むな」「魚鳥を食べてここで勤行してはいけない」などの禁止事項を道場に張り出し、そういう事をするような者は道場へ入ってはならないなどというようなことが行われていたようです。

これは要するに、善人は道場へ入ってもいいが悪人は入ってはならないということなんです。そういうことをいう人は自分がいつでも善人でおれるつもりでいるけれど、「さるべき業縁のもよおさばいかなるふるまいもすべし」で、縁がくれば自分もつまらぬ事をやりかねない人間であることを知らないのだと、そうここでいわれるのと同じです。いわば、いかにもそういう人たちは自分たちは賢善精進の者だというような態度であるけれど、そういう人たちも宿業的人間でしかない、にもかかわらず、宿業的人間であることを知らず、外面的に善人の振るまいをしているのは、外を飾る虚仮の心をおもちだからではないかと、唯円房は申されるのであります。

すなわち、こうした「なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからず」というふうな張り文をして人を選別するのは、善悪賢愚を選ばず平等に救いたいという如来の本願のお心にはかなわない姿だといわれるのでしよう。